

一八八三年八月二十日(月)

ドツキネーシヨル
南神村の寺院で信者と共に

モニモハンへの教訓——ブラフマンを悟つたしるし——瞑想のヨーガ

夜の七時か八時ころ、タクール、聖ラーマクリシユナは小寝台の上で、蚊帳かやの中に入って瞑想しておられる。校長は友人のハリと共に床に坐っている。キリスト曆一八八三年八月二十日、月曜日。スラボン黒分二日目。

最近は、ハズラーがずっと此処ここに泊まりこんでいる。ラカールもほとんど此処に住んでいるが、時々アダルの家に泊まりに行く。ナレンドラ、バヴァナート、アダル、バララーム、ラーム、マノモハン、校長たちは、毎週のように来ている。

以前、長い間タクールのお世話をしていたフリダイが、郷里で病気をしているという報しよせに、タクールは非常に心を悩ませておられた。ある一人の信者が、ラーム・チャトジェー氏に十ルピー手渡しして、今日、フリダイに送る手筈になっていた。手渡すとき、タクールはいらっしゃらなかったため、まだ御存知ではない。また今日は、一人の信者がキラキラした金属製の水差しを持って来た。いつかタクー

ルが、「この部屋で信者たちが使う水差しを持ってきておくれ。キラキラした色のがいいな」とおっしゃったからである。

校長の友人ハリさんは、十一年ほど前に妻に死別して、その後再婚していない。母、父、兄弟姉妹、みな揃っている。彼は、大そう肉親思いでよく彼等の面倒を見、世話をしていた。年令は二十八、九才である。信者たちが来て坐っているのに気付かれたタクールは、蚊帳から出て来られた。校長たちは床に額ずいてごあいさつ申し上げた。そして蚊帳をたくしあげて上に引っかけた。タクールは小寝台の方に坐られてお話しになる。

聖ラーマクリシュナ、校長に向かつて――

「蚊帳かやの中で瞑想していたよ。考えたんだが――これは、ただ一つの姿を思い描くだけのことじゃないかってね。それであんまり気が進まなかった。あの御方が、パーツと輝いて見せてくださればいいんだが――。それから、こうも思ったよ。いったい誰が瞑想しているのか、誰を瞑想しているのか」

校長「ごもっともでございます。あなた様がおっしゃいますように、あの御方ご自身が人間や動物や世界になっていらつしやるのですから――。瞑想しているのも、あの御方でございます」

聖ラーマクリシュナ「それにさ、あの御方がさせなければ出来やしない。あの御方が瞑想させるから瞑想ができるんだよ。お前、どう思う？」

校長「はい。あなた様には私わががないので、それで、そのようにお感じになるのです。私わがの無いところにこそ、そういう状態が発生するのでございます」

聖ラーマクリシュナ「だけど、私はあの御方の召使い、あの御方の弟子、という感じは少し残っていた方がいいよ。私がいんな仕事をやっている間は、私は召使い、神さんが御主人、と思うのが、大それたことなんだ。いろんなことをしている時には、召使い、弟子、という感じをシッカリ持つ方がいいことなんだ」

モニモハンは至高梵パラブラフマンとは何か、いつも思索していた。タクルルは彼に教えるため、またお話を始められた——。(訳註、モニモハン／モニ——マヘンドラ・グプタが『不滅の言葉』の中で用いている仮名の一つ)

聖ラーマクリシュナ「ブラフマンは虚空アーカシヤのようなものだよ。ブラフマンのなかに変化はない。炎に色がないようにね。それが力シャクティとして、あの御方はいろいろにお成りなさる。サットヴァ(調和性・悟性)、ラジャス(積極性・建設性)、タマス(消極性・破壊性)の三性トリグナは、シャクティの性質だ。無色の炎に白い物を投げ入れると白く見えるだろう。赤いものを入れると赤く見える。黒いものを投げ込むと黒く見える。ブラフマンは三つの性質を超越している。あの御方はこういうものだ、口で言うことは出来ないよ。言葉を超越しているんだから——。ネーティ、ネーティ(これではない、これではない)と打ち消していつて、最後に残るもの、そこにある常楽よぎ、それがブラフマンだ。

ある娘の夫がよその家へ行つて、同じ年頃の若者たちといっしょに部屋で坐っている。娘と娘の友だちが窓越しに若者たちを眺めている。友だちは娘の夫を知らない、一人の若者を指して、『あれがあんたのおムコさん?』と聞く。娘は、フ、フ、と笑つて——『いいえ』もう一人を指して、『あれがあんたのおムコさん?』——『いいえ』また別な一人を指して、『あれがあんたのおムコさん?』

——「いいえ」最後に娘の夫を指して、「あの人？」そのとき娘は、「はい」とも言わず、「いいえ」とも言わず——ただ気取った様子でニンマリ笑って黙っている。そこで、友だちはその人が娘の夫だと分かるわけだ。真正ほんとのブラフマン智のあるところ、沈黙があるだけだよ」

〔善サット親サンガ交——在家者のなすべきこと〕

さらにモニに向かつて——

「いやはや、わたしはどうして、こうよくしゃべるんだらうね？」

モニ「あなた様がおっしゃいますように、煮えたギー（バター）に生のルチを落としますと、ジャージャー音がします。信者たちの靈性を養うために、あなた様はお話しになるのでございます」

タクールは校長と、ハズラーマハレーヤイ氏のことを話し始められた。

聖ラーマクリシュナ「善人はどんな性質か、わかるかい？ 人を困らせない。人の邪魔をしない。招待されて行った場合、こんな様子をしたり、言ったりする人があるね——私は別な場所に坐らせてもらいたい——。神様を正しく信仰していれば、決して間違った道に足を踏み入れない。つまらないことで他人に迷惑をかけたりしないよ。」

善くない人たちと付き合うのはやめた方がいいよ。そういう連中からは離れていろよ。体をよけていろよ。（モニに向かつて）お前は どう思うね？」

モニ「仰おほせの通り、不善の人との交際は、心を非常に墮落させます。ですが、あなた様がおっしゃ

るように、勇敢な人、英雄の場合は別です」

聖ラーマクリシュナ「どんな具合に？」

モニ「弱い火に木片を投げこむと消えてしまいます。火がゴーゴー音をたてて燃えさかっているときには、バナナの生木を投げ込んでも平気です。バナナの木は灰になってしまいます」

タクルルは、校長の友人ハリさんのことについてお尋ねになった。

校長「この方は、あなた様にお目にかかるために参上いたしました。ずっと以前に奥さんを亡くされまして——」

聖ラーマクリシュナ「何をしているんだい？」

校長「別に、何もしておられません。ですが、家庭内で両親や兄弟の世話をよくしておられます」

聖ラーマクリシュナ「ハッハッハッ、何だい、それは？　じゃ、カボチャ切り小父さんおじか？　あなたは社会人でもないし、ハリ(神)の信者でもない、そりゃよくないね。家に小父さんおじがいて——夜昼、女子供の相手をしていて、部屋の外に坐りこんではプカプカ煙草をふかしたりしてロクな仕事もしない。けれど、家のどこへでも行つて(インドは大家族制で、幾組もの夫婦が同じ家に住んでいる)、カボチャを切つてくれる。女たちはカボチャを切るのが苦手だから、子供をやつて小父さんおじを呼んでこさせる。小父さんはカボチャを真つ二つにしてくれる。これがこの男の役目だ。だから、カボチャ切り小父さんおじという呼び名なんだよ。

あなた、コレもアレもしなけりゃね——それに、アレとアレもね。神様の蓮のみ足に心をおいて、

世の中の仕事をちやんとしなさいよ。一人でいるようなときは信仰の本を——『シュリーマッド・バーガヴァタ』か『チャイトニヤ・チャリタムリタ』——といったような本を読むといい」

夜も十時に近くなつた。まだカーリー殿は閉まっていない。校長は広い境内を通つてラーム・チャトジェー氏と語り合いながら、先ずラーダーカーンタ堂、次に大実母カーリーのお堂へ行つてごあいさつ申し上げた。月は既に昇り——スラボンの黒分二日目、中庭も堂塔のたたずまいも、ひとしお美しく眺められた。

タクルの部屋に戻つてきてみると、タクルは食事をしておられる。南向きにお坐りになつて、シュジのバヤスを少々と、ルチを一、二枚召し上がった。それからしばらくして、校長と友人は、タクルにごあいさつ申し上げて帰路についた。今日はカルカッタに戻るのである。(訳註、シュジ——荒く挽いた穀物の粉。バヤス——穀物に牛乳と砂糖を入れて粥にしたもの)